IZANAI～誘い～

Twitter novel book

瑠冠

IZANAI～誘い～

Twitter novel book

瑠冠

いつでも一人だ。どんな時でも孤独を手放した事はない。
夜空を時折見上げるのも誰とも目を合わせたくないから。
ただ星を見つめると思い出してしまう。
君の声。君の言葉。君の書く文字。全てを。
地上にも空にも心が安らぐ場所などない。
涙を流せる様になった。それがせめてもの救いだ。

嵐のように人の手には負えない独占欲が彼の心を侵食していく。
奪う為には手段を選ばない非情な光が瞳に宿る。
狂気が見え隠れしている。
裏にあるのは誰にも愛されない悲しみ。
優しさという大げさなものはいらない。
ただ人という光を羽織れたなら。
それが事切れた彼の最後の願いだった。

過去に向かって笑う君の笑みはどこか壊れているように見えた。
その様子にどうしようもなく惹かれてしまう僕もまた、
どこか壊れている。
崩れ落ちる直前の刹那にだけ香る美が君から止まらない。
このままずっと見つめていたい。希望に狂気を見出す君を。
黒い涙が君の頬を伝った。美しい。

もうこんな時間か。
深夜から万年筆を走らせていたら、
いつの間にか空が紫がかっていた。
ほっとしたのも束の間、
なぜか君がふとした瞬間に見せた淋しい瞳を思い出す。
気を抜くといつも心をよぎる、あの孤独な表情。
横顔にどうしようもなく魅せられていた。
あの眼は、僕と同じだった。

君のために走るこの道に降る雨はダイアモンドかと見紛うほど
美しく感じる。差している傘も意識せずに僕は駆け抜けた。
あれほど雨の日が嫌いだったはずの僕。
君が現れた瞬間から雨はただ服を濡らす嫌なやつから、
空から降り注ぐ宝石に変わったんだ。
世界が変わるのはこんなにも容易い。

無惨にも切り裂かれた生命から流れる涙が、
僕の心を捉えて離さない。
悲しみに抗うその姿は痛々しく美しい。
その慟哭をいつまでもこの心に響かせてくれ。
いつまでも聴かせてくれ。
その痛みの後にやってくる乗り越えたものだけが
手に入れる強さを君は知るから、その涙は悲しくないんだ。

痛みに顔を歪めている最中に降り注ぐのは、
冷酷で勝ち誇ったかの様な高笑い。
指差しながら腹さえも抱えて笑う。
でも目を離すことができなかった。
あの心に空いた大きな穴を。
何ものも満たしてはくれない悲しみという名の空虚。
笑っているはずなのに泣いている。心が敗北しているから。

夜風が心地いい。
頬を掠めるその涼しげな風は
秋が近づいている事を教えてくれている。
ベランダに出て缶ビールを開ける。
その一口が小さな幸せであり、全てのような気さえした。
こういう時は柄にもなく星を眺めたりもする。
時間がゆったりと過ぎていく。自然と一人きり笑みがこぼれた。

この傷ついた心は誰にも分からない。
そんな風に何度はねつけて来たのだろう。
心を開きたい。でも開けない。
葛藤のさなかに君の笑顔に出会った。
君の近くにいると僕も生きていてもいいんだと、
そんな風に思えてくる。
泣きながら聞いた。僕は生きていていいのですかと。
君はただ頷いた。

他の人が聞けば嘲笑にも聞こえそうな君の言葉。
でも言葉を受けている僕には分かる。
その一言には僕を自分の足で立たせたいという
祈りが込められているという事を。
君にしか僕に言えない事がある。
君がいなければ僕はいつまで経っても一歩踏み出せないまま。
背中を押してよ。僕の隣で。

いらないものを踏み潰す様。
それを彷彿とさせるようなヒールな雰囲気は
どこまでも周囲を黙らせる。
過去を感じさせない甘い言葉は心にするりと入り込む。
それなのに心の中だけで笑うたび
一つずつ何かを失っていくようで。
じわじわと抜け殻になっていく。
いつか泣ける日がくるだろうか。

彼が悔しがる姿は誰一人見た事がない。
いな感情さえ持ち合わせているのかさえ誰も知らなかった。
ただ時折見せる瞳の奥の暗い闇は、
全てを吸いこんでしまいそうなほど憂いを帯びていた。
そんな彼が初めて泣いた日。
その日から彼は心の鍵を固く閉める事を心に決めたのだろう。
遠い追憶。

一気に緊張感が走る。
普段の柔和な雰囲気とはかけ離れた、
周りまでしびれてしまうような怒り。
いや、むしろ普段の方が作り込んだ虚像だったのだろう。
隠しきれなくなった激しさはあらゆるものを焼くようだった。
その炎は他ならぬ彼の心を焼き尽くすものなのだろう。
悲しさが滲んだ。

この世に自分が存在している事さえ罪に思う。
そこまで心を攻めたて狂いそうになるこの気持ちは、
誰にも分からないだろう。
にも関わらず、暖かさに触れた時 理解出来ない涙が溢れる。
心は死んだはずなのに、涙が溢れる。
生きていても、いいんだ。
そう気づけた時間は刹那でも永遠だった。

君が悲しい眼をして祈る姿に光差す。
あまりにも綺麗で息を呑んだ。
この世の全ての悲しみを
その身に押し込めたような存在だ、君は。
ふ、と力が抜けた様に浮かんだ笑顔はほんの一瞬。
でもそれを目にした者の心には永遠に焼きつくその表情。
生きている間中、心から離れる事のない美しさ。

壁にもたれて息をあげる。近頃体調が優れない。
その理由は、一番自分がよく分かっていた。
それでもあがくのはなぜだ。自分に聞く。
その答えは、まだ見た事のない景色を見てみたかったから。
あともう少しで手が届くというのに。終わりが近い。
でもなぜだろう。こぼれるのは笑みだった。

疲れきった体で冷蔵庫を開ける。
中にはビールだけ並んでいる。
綺麗に並べられた500ml缶のうち一本を手に取り
プシュ、という音を鳴らす。
大した楽しみも持っていないが
強いていえばこれが楽しみなのだろう。
一人きりの部屋はやけに静かで
心の中に孤独が入り込んでくるようだった。

僕の世界を守りたいわけじゃない。ただ君の世界を守りたい。
それだけなのに、この単純で純粋な思いを
なぜそんなにも阻むのか。
悲しみにくれてばかりだと言わんばかりのその眼も
何の役にも立たない。戦っているさ、いつだって。
この心の中で疼く傷と。泣きながら、果てながら。

結晶のような美しさに
身を投じる事ができればどんなにいいだろう。
その美しさの名前は私にとっては信じる事、という所だろうか。
にも関わらず未だに闇と格闘しているこの心。
どす黒い景色から見えるのはいつだって一筋の光だけ。
手で触れ、掴む。その光を。君に繋がっている気がして。

観葉植物を育てるのが好きだ。
というよりも、水やりが好きだというべきか。
帰宅してから水コップ一杯を緑に注ぐ瞬間が、
なぜだか何より幸せなのだ。
周りは誰より一番僕の事を観葉植物が似合わない人間だと言う。
だけど好きなものは好きで。
大きくなれよ。葉っぱを優しく撫でて言った。

誰かの目から見れば狂気にさえ見えるだろう。俺の没頭ぶりは。
他人が遊んでいる間、文字と格闘し続ける様は
人を近づけさせないほど熾烈なものだったのだから。
心に残る乾ききったかすみ草の花は
昔の自分の片鱗を僅かながら伝えるように揺れている。
もう吸いとる水さえ失っているのに。

震えていた。怒りに。
どうしてこうも傷に塩を塗るような、
一番触れられたくない出来事ばかり引き起こるのだろう。
自分以外の誰かの周りに引き起これば、
その人にとっては何でもない事だというのに。
なぜ、よりにもよって私のところなのか。
何を叩きつけても収まらない。私を、止めて。

時折過去を思い出す香りに遭遇する。
それが香水なのか何なのか検討もつかないが
出会うたび心締め付ける。
香った先を振り返ってみてもそこには何もない。
また前を向いて歩きだすとすぐ消えてしまう。
君なのか…？知らぬふりをしていた、今まで。
君の前でだけは涙流さないと決めたのに。

君と共に眠っていると、波に揺られているような気分になる。
無駄に入っていた力が体から抜けていくような感覚。
社会に出ている時、自分がどれだけ肩肘を張って
生きているのかがこういう瞬間によく分かる。
こんな風にしか生きられないんだ。
君が眠っているのをいい事に力なく笑った。

嘲るような笑いに隠された悲しみ。
そうやって嘲る事でしか進む事のできない弱さは、
自分自身が一番よく分かっている。
だから、諭されても貶されても提示された答えは
とっくに自分の中でも出し尽くされたものばかり。
いい加減嫌気が差す。弱いとよく吠えるものなのさ。
この俺のように。

目覚まし時計の音が混濁した意識からこちらへ引き戻す刹那。
今日はとても寝起きの気分が悪い。
それだけは自分でもよく分かった。
寝ぼけ眼ままベットの隅に座り込んだまま頭を抱える。
むしゃくしゃした。
闇を見つめる鋭い眼光は心なしか涙ぐんでいる。
昨夜の事を一瞬で思い出したから。

何を見ているの、と不意を突かれて聞かれた。慌てて隠す。
大して仲良くもない奴にこうやって干渉されるのが一番苦手だ。
何でもない、と素知らぬ顔で言う。
思惑通り対象は別の標的へと移っていった。
典型的な興味本位だ、所詮。言える訳もない。
この世を去った君の写真を見ていた事を。

自分自身が背負っているものを誰かに託す事ができれば
楽になれるだろうか。
ぼんやりそんな事を考えながらボールペンを走らせる。
ペンを動かす指が止まったのは、
もうすでに答えを手にしているくせに
自問自答を繰り返している事実が妙におかしかったから。
笑ってやったよ。自分の事を。

柔らかな日差しがまるで君のようで。
思い出されて胸が痛くなる。
かつて君が言ってくれた言霊だけ辿って生きている俺。
今の俺を君が見たらどう思うのだろう。
ずっと見守っていてくれているんだろ？会いたいな…。
叶わぬ願いと知りながら抑えきれない思い。
手を伸ばせば届くだろうか。

白い雲が浮かぶ空の下、君の小さな手を引きながら
歩いているだけで幸せだ。
絵本に出てきそうな世界の中で、君を見つめる。
緊迫という言葉からは一番程遠い世界だった。
はしゃぐ君を見つめる表情は嫌でも優しくなってしまう。
例え束の間だとしても、この刹那が何より大切だと思った。

●●●●●●●

その瞳に映るのは過去なのか、未来なのか。
それとも目の前の誰かなのか。
時折見せていた悲しげな眼は過去を見つめ、
柔らかな眼差しには未来を湛えていた。
そして今を生きている時には安堵の心を抱きしめている。
孤独の闇はまだ心に住むけれど
決して消えない灯火も見えたんだ。だから。

●

●●●●●●●

眩暈が隠しきれなくなるのも時間の問題か。
ごまかしきれるまでごまかす、
この性質を変えられないまま、一人きり時を過ごす。
心の中に君を抱えたまま壁にもたれかかり、
自分に向けて、ふ、と口元だけで笑った。
遠くで聞こえる悲鳴を背に崩れ落ちた時、
思ったのは優しい君の笑顔だった。

●

心に置かれた攻撃的になるボタン。
決してそれだけは押してはならないボタンを、
何度踏みつけられ蹴散らされ吹き飛ばされた事だろう。
分からない。
怒らせると本当に怖いタイプは感情を内に秘めるタイプだ。
ケラケラ笑っていると甘く見ると突然修羅と化す。
もしかしたら僕の事なのかな。

いつも心の中でひまわりが穏やかに揺れているわけではない。
嵐が吹き荒ぶような日もある。雨が降りしきる日もある。
だけど変わらず黄色の笑顔は咲き続ける。涙を隠して。
晴れの日はまた穏やかに風を友にしている。
強さとは泣ける事でも泣けない事でもなく、
在り続ける事かもしれない。

月にまるで自らの傷が刻まれているかのように、
じっと見つめた。
あの銀色の光の根源を自分の心を見つめるように睨む。
決して闇に心を染めたい訳ではないのにこんなにも抗っている。
見えないものに責められ、囚われたままの自分がいやになる。
あの銀の光で心を染めたい。できる事なら。

惜別の夕日が今も色濃く心の中に赤く刻まれている。
瞳に映り込む夕日特有の光は、背中をさらに寂しく見せる。
夜に星を眺めてみても、
朝に青い空を仰いでみても黄昏時の色が消えない。
心奪われてしまったのだろう。あの日のオレンジに。
ならいっそ齧り続けてみせよう。あの日の夕日を。

帰る場所など存在するのか。一人彷徨うこの俺に。
その問いの答えがYesでもNoでも関係はない。
この心の氷を溶かす太陽はもういない。
笑いかけるのはあの日の幻だけ。そう思ってきた。
その心を溶かしたのは通り一遍の優しさではなく
見つめ抜く強さを持った君の心以外何物でもない。

自身の始まりと終わりは自分が一番知っていると思っていた。
そしてそれがとんでもない思い上がりだという事にも
気がついていた。息が切れるこの体を誰より自分自身が
嫌っているこの矛盾にどう立ち向かえばいい？
分からなくなったから君が教えておくれよ。
光を見つめる方法はそれだけ。

コップに口をつける事さえ煩く感じた。
深夜の闇は心をとてつもなく孤独にさせる。
肉眼で見えるものは
全て心を見つめる景色に引き剥がされていく。
この体を現実に留めているものが
一体何なのか自分でも分からなくなるほどに。
衝動を抑え悲しみを抑えるばかり。
爆発する時 俺はもう――

●

眩暈の中で思う。君を傷つける事だけはしたくないと。
君を失ってなお君に悲しい顔をさせてしまう俺は
本当にどうしようもない。今やっとできるのは歩く事だけ。
気づけば涙が頬を伝う。もう笑みを浮かべ自分を笑うしかない。
消えゆくものを感じながら体は壁に顔はただ上を向いていた。

報われた涙の向こうにあるものは小さくとも大きな光。
体は暗闇の中に置かれていても、心は光の中にいた。
温かな場所にいるような気分で追憶を巡らす。
ああ、生きていてよかった。その言葉しか思い浮かばない。
孤独から救われたのではなく、自分の胸の内に手にしたんだ。
永遠の何かを。

あの時の選択に後悔はない。
ああするしかなかったという
漠然とした根拠からくる確信などでは勿論ない。
人の人生を変えるという出来事が
どれほど重いものなのか身を持って知るからそう言い切る。
そこに誰も入り込む事はできない。心の葛藤を人は知らない。
この目が何を見てきたのかも。

自分の亡骸を自らの手で抱きしめるような感覚に陥った事が、
君はあるか。無残な姿になったそれに触れる手は震え、
涙も流れないほどの悲しみだ。
そして、その時人はもう一度蘇る。新しく生まれたように。
自分だけが知る悲しみを脱却するための戦いへと向かう。
そこから全て始まった。

記憶を眠らせてしまえば自分の中には何も残らない。何も。
覚えている、覚え続けているという事実が
たとえ心を切り刻み続けたとしても、
その記憶を忘却する事を僕は選ばない。
その痛みが何を与えるかなんて事には興味はない。
ただ存在する理由を全て失うくらいなら、何もかも抱えたい。

潤んだ目に映る景色はいつだってもどかしい。
重い体を預けられる壁はいつだって追憶を繰り返させる場所。
穏やかな海のような心で思うのは自分の人生ではなく、
目の前にいる君の人生だったというのは、不思議なことだ。
あんなにも闇の中に閉じ込められていたというのに。
解き放たれる。

最後の力を振り絞り震える声で全てを託した。
託された方の苦痛にも似た責任感を知りながら
託した俺をどうか許せ。
ああするしかなかった、なんて事は言わない。
お前じゃなきゃ、だめなんだ。それ以上の理由が必要あるか？
この人生を預けるに相応しいものに出会えた。
それだけで本望だ。

白の光に隷属した記憶はもはや遠く彼方だ。
今、取り戻すあの感覚。
心の中に涙以外のものが広がるのは、いつぶりだろうか。
穏やかでいる事がやましい事だと思っていた。
今、背にある翼は僕のためにあるわけじゃない。
一番近くで君を見守るために。
君の周りでいつでも僕の羽根が舞う。

あの日に帰ると心が嵐の様に荒れ狂う。
表情には微塵も出さない。だから誰にも気づかれる事はない。
君の指にはめた指輪。もう少し早くはめてあげたかった。
あの日から僕は人である事さえも捨てたのかもしれない。
生き永らえたという堪え難い事実だけを身に纏ったまま
涙の道を歩き出す。

僕の心を盗むのも大概にしておくれよ。
もう何も残らないくらいに全ては君の手に渡っているだろ？
苛立ちの背に夕日の光を背負ったあの日、
焼き付いたのは味気ないカップ麺の味だけ。
衝動に任せ、流しに向かって一直線に投げ込んだ。
それで気が済むわけでもないのに。全く人間って奴は。

他人にとっての破壊でも
俺にとってはそれだけが生きる術だった。
この心を壊す勢いで駆け抜ける。君は何も言わなかった。
何も言わずに見守っていた。
その行動が君の心を苛んだはずなのに。
自分が楽になることを同じように選ばぬ事実を知った時の
俺の泣きそうな顔を笑ってくれよ。なあ。

まだあの声が頭の中で反響している。
弱かった頃の俺が抱え込んだ声。
それは名声に縋る者のおぞましい轟音。
今の俺はあの頃よりも強くなったと言えるのだろうか。
分からない。分からないがそう言いきるしかないんだ。
何が強さかなんて問題じゃない。
強くありたかった、ただ君のために。

傷ついたという事実を認める事がいやだった。
傷ついてなどいないと自分自身にも言い聞かせたし
貴女にもそう語っていた。何かを振り払うように。
何かから逃げるように。貴女がぱっと僕の手を掴む。
何も言わずに見つめる視線が痛い。
その手の温もりだけが僕に涙を零す事を許してくれた。

荒廃した心は外からは見える事はない。だから、酷くなる。
どんどんと痛みは広がっていく。
この心を、皆が見過ごしたこの傷を、君は一目見るやいなや
真っ直ぐに見つめるものだから、僕は急に怖くなった。
見つからない方が楽だと手を振る僕に
君は帰る場所があると教えてくれたね。

暗闇の中で、ただ一つ点いている灯りをじっと睨む。
それは灯りを見ているようで灯りを見ていない。
視線の先ではない。視線の奥の自らと対峙していた。
思い出すなと人は言う。忘れてしまえと否定する。
そんな言葉は届かない。この自らの時間だけは。
全てが及ばない時間が、欲しかった。

積み上げられたCDを猟奇的に見つめる。
一番上の一枚を手に取り乱暴にケースから取り出すと
パソコンに読み込んだ。
口唇をつけた缶ビールの方向も向かず
音楽プレーヤーへ送り込んでいく。
聴く時間もないというのに。何をやっているんだ俺は。
どこかに欲しいものでもあるっていうのか。

夕日を背負ったあの日心は涙で引き裂かれていた。
変わってしまったんだ。全てが。
後悔する事さえ許されない道に俺は入る。
それがどんなに暗く長い道程であろうとも、
誰よりも輝く光の道がその先にある事を信じているから
決して揺るがない。
全てを投げ捨てた人間の強さを決して侮るな。

君の声が遠くなる。
どんな悲しみにも耐える事が出来たはずなのに、
それには耐えられなかった。必要なんだ、君が。
手が届く間に、手で触れる事ができる間に
その一言だけを伝える事ができずに。
涙を枯らした後は涙の流し方さえ失い
抜け殻のまま途方に暮れる。
その時聞こえた。君の、声。

いつまで反響を続けるつもりなのだろうか。痛がる俺の声は。
一番抜け出したいのは己だというのに
簡単に抜け出せばいいと言う。言ってくれるじゃないか。
心を閉める事にも、もう飽き始めた頃、君の目を見てしまった。
この小さな変化が自らにどんな影響をもたらすのか。
この目で見てみたい。

挨拶程度じゃ見えない事を抱えすぎたのかも知れない。
おかげで瞬間に迸る怒りは抑えきれないほどに増幅している。
もう取り戻せない。でも、もういい。隠すのはやめだ。
今まで見てきた全ての景色がこの身を動かす。
その事実を肯定はできない。まだ。ただ否定はしたくない。
それだけだ。

気がつかないうちに机にうつ伏せて寝ていたようだ。
すでに日の光が差している。
誰もいない部屋で一人朝を迎えると、
なぜこんなにも空虚な気分になるのだろう。
うん、と伸びをする。ふと隣を見ると置き手紙とサンドイッチ。
あいつ、と思いながらもこんな事で人生も悪くないと思えた。

花を見るといつも思い出す。責任を感じ涙したあの日を。
痛みを感じたのはあんなにも遠い記憶だというのに、
なぜ鮮やかに心に蘇ってくるのか。
振り切らずに共に生きる僕。忘れる事など考えた事もなかった。
消し去るだけが解決策じゃない。
そうこの心が叫んでならないんだ。仕方ない。

花びらが散りゆく。
さっきまで存在していたはずの枝先から遠のく速度は、
なぜこんなにも早く感じるのだろうか。
咲き誇るまでにあれほどの時間を費やしたというのに。
嘆くばかりの僕にあの花はまだ散ってなどいないと君はいう。
今そうして涙する理由。その中に咲き続けているんだと。

破滅から引き返す音はこれほどまでに静かなものだろうか。
それともただこれから来る何かの前の静けさに過ぎないのか。
まあいい。俺にとってはどちらでも同じ事だ。
やってくるのが嵐でも光でも受け止めるためには覚悟がいる。
そんな心だ。この体が持つ心は。弱くて強い。君の住む心。

目を瞑る度思い浮かぶのは幸福の切れ端と現実の痛み。
取り戻したいと願う事は全てを否定する事。
それがなかなか分からないようで、
今日もまた人生を知らぬ間に奪っていく。
目に見えない涙を見ようともしないままでいないで。
君の目にもしその涙が見えるようになれば絶句する事だろう。

優しさの結晶のように遠くではしゃぐ君を見つめていたんだ。
そう語る声は慈しみに溢れていた。
うっかり涙してしまいそうなほどに。
視線が眩しすぎて痛いという目に
一度も遭った事がなかったかもしれない。
視線を向けられる事がなくて傷ついた事はあっても。
伝えると君は静かに笑った。

壁にもたれかかり見つめる空はいつだって変化の連続。
一時でさえ同じ瞬間は存在しない。二度と。
だからこそ当たり前の風景さえ愛おしく思う。
一幅の名画として切り取ってみたくなる。
自然も雑踏もこちらが耳を傾ければ応えてくれるものさ。
ただ聴こうとしていないだけでね。

瞬く星を見つめながら思う。
君の喜ぶ姿さえ
いつか忘却の彼方へ消え去ってしまうのだろうか。
それを恐れてしまう僕を笑うなら笑えばいい。
僕はただ君が”ここ”に共にいるから
それと同じように忘れたくないだけ。
共に生きていても忘れる事は多いというのに。
君にだけは笑われてもいい。

言葉は憂いを帯びている。俺の発する言葉は。
だが知る人もいる。心の奥底の本音を。
惑わされるな、俺に。
泣いていても喜びなんだ。不幸に見えても幸福だ。
何も見えちゃいないんだよ、お前には。
本当に大切なものはなんなのか。何一つ見えていない。
それでも、信じていた。おまえを。

目を潤ませたのがばれてしまっただろうか。
それをどんな事より恐れる俺を
誰よりも先に自分自身で笑ってやった。
そうやって守ってきたのかもしれない、自分を。
知らぬ間に刷り込まれた防衛方法。
誰かに笑われる前に自分で笑え。
いつだって、そう己に言い聞かせてきたのかもしれない。

たったひとひらの花弁。
それだけで一瞬にしてあの日に還ってしまう。
消す事は出来ない。ただ、進むしかない。
受け入れるでも否定するでもなく。
結末さえ光であれば全ての闇を飲み込むというなら
一度試してみるのもいい。
壮大な人生を賭けた実験の最後を君は、
見守ってくれるだろうか。

眠れない夜に思い返す事はいつも決まっている。
いやというほどに。自分でもあきれていた。
忘れたはずだと何度反復してみても、
それは所詮嘘に過ぎない。嘘を吐き続ける。
自分自身にも、そして周りにも。
そうして孤独に飲み込まれそうになっても君って奴は。
その気もなしに俺を救う。

雪を踏みしめる音。
空気は煌めきさえも感じさせるほど澄んでいた。
マフラーに顔をうずめながら目元だけ覗かせ歩く。
足音を止める、それだけで
白い結晶が降り注ぐ音が聞こえてくるようだ。
俺の悲しみもいつか誰かの光になるといい。
行く手を照らす灯りになれば冷たさも温もりに変わる。

ドアが閉まり人が去る。
自分の部屋で一人きりになり椅子の背もたれに体重を預けた。
静けさを装っても誤魔化せない。
その瞳の奥で唸りを上げる怒りを。
呼吸の音さえも聞こえない部屋の中
ただ心の動きだけが感じられるようだった。
理性だけが自身を知るなどと考えた俺の甘さといったら。

●

苛立ちを抑えたフリをしていた。
一気に暴発するそれはシンクを凹ませてしまいそうなほど
募り募っていたようで。無残に散らばる残骸に見向きもせず、
磨りガラスの向こうの景色をじっと見つめた。
何も見えはしないのに。
さも何かが見えるはずだと信じたいかのように。

立ち尽くすだけで伝わってくる笑みが悲しい。
この瞬間のためだけに生きてきたのか。
今世全ての喜びを踏みしめるようにして足場を確かめる。
遂げたい思いは余りにも切なかった。
それでも笑顔見せるのか、君は。
世界があんまりだと嘆いても君の心が笑うのなら、
その決断を僕は守ろう。

傘で隠れた表情は窺い知れない。
ただ、鬼気迫るものを放っていることだけは確かだった。
雨の音だけが耳に残るアスファルトの道。足音は聞こえない。
足を止めた時が世界が終わる時だ。
そんな背中が背負うものとは。
思い返すにはあまりに悲しい優しさと温もりの記憶。

後悔のない道など本当は存在すらしないのかもしれない。
それでも今守りたいものができたから。
背負う過去の俺は自分のためだけに修羅と化していた、
ただそれだけにすぎない。
こんな俺でも必要としてくれる人がいるのなら……
いな俺が必要としているのなら。
君のために、修羅になる。

表紙イラスト描画：著者

It was influenced by performance of E.K,
and I dedicate this book to my Vergilius.

I sincerely appreciate all of you.

Thank you for reading this to the end.

IZANAI~誘い~　Twitter novel book

*

第１版　２０１２年１２月２４日

著者　　瑠冠
発行者　瑠冠

ブログ：http://ameblo.jp/ruka-philosophia
公式ホームページ：http://rukanouta.hannnari.com
電子書籍：http://p.booklog.jp/users/ruka001

©瑠冠　2012　All rights reserved.